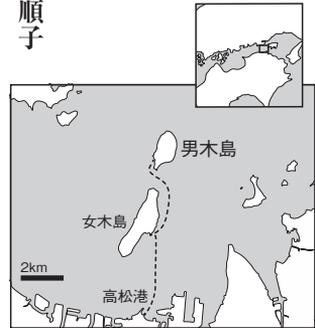


NPO法人 男木島図書館

# 教育と交流の拠点となる 図書館を運営——小さな島の大きな挑戦

男木島図書館理事長 額賀 順子



男木島：高松市の北10.1kmにある瀬戸内海国立公園内にふくまれる島。面積1.34km<sup>2</sup>、周囲5.9km、人口163人（令和2年5月1日現在）。山がちの島で、南西部の斜面に階段状に集落がある。近年、瀬戸内国際芸術祭の会場や海洋レジャー交流の島として注目を集めている。

## 気軽に立ち寄れる地域の図書館を

「なんか面白い本はあるかいな？」

来館した住民の第一声は大体決まっている。この人の好きなのはこんな本、と訪問者の好みを思い浮かべながらおすすめする。それが筆者の日常だ。

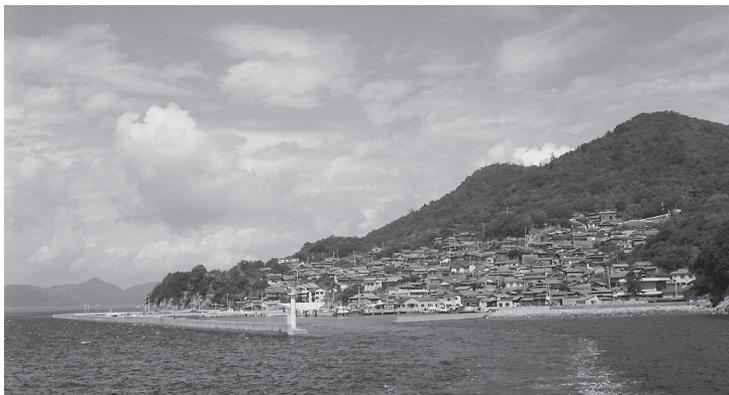
瀬戸内海に浮かぶ小さな島・男木島。人口一六〇人のこの島に二〇一六年二月一四日、男木島図書館と名づけた小さな私設図書館を開館した。

開館の二年ほど前、男木小中学校再開のニュースが高松を中心に瀬戸内を沸かせた。島に子どもがいなかったため小学校は二〇〇八年、中学校は一年から休校となっていたが、一三年の瀬戸内国際芸術祭を契機に三世帯が島へのUターンを決意し、住民とともに学校再開を求めて、島

の人口を大きく上回る八八一人の署名を高松市長へ提出。島の住人、高松に住む方、島外で暮らしている島出身者など、男木島に縁のある人たちの団結により、男木小中学校の再開が決定した。

この運動の中心となったのが、筆者の夫・福井大和である。島の出身で島外で暮らしていたが、男木地区コミュニティ協議会（註1）からのウェブサイトの作成依頼をきっかけに、島に長期滞在することとなり、Uターンを決めた。学校の再開はゴールではなくスタートである。島に住んでいる人の満足度を高め、新たな移住者を迎え、持続的な地域コミュニティを再構築する必要があると考え、筆者が提案したのが《図書館》の設立だった。

これは、移住を考えている誰しもに共通することかもしれないが、私自身が移住するにあたって、島の皆さんとの



島の西南部に位置する男木島港には2時間おきに定期船「めおん」が就航する。人家は港の近くに集まっている。

コミュニケーションをどう取っていくのか、子どもの学習環境はどうか、といった不安を抱えていた。その一つの解決策になりうると考えたのが、島に文化をもたらし、老若男女を問わず、住民から来島者まで利用できる図書館の開設だった。

例えば、子どもたちは大人の目のある場所での自主学習をすることができ、本を通じて自然に周囲の人たちとコミュニケーションを取ることを覚える。島に住む高齢者が少し人恋しくなった時に無料で気軽に訪れることもできる。図書館は、誰もが平等に知を享受できる場所なのだ。

### 住民の力を借りて図書館を開館

図書館の開館に向けて動き始めたのは二〇一三年の秋。空き家と呼ばれる家は多かったが、「長期休みの時に帰島する」「仏壇を動かしたくない」「家の権利者がわからない」などの理由で、借りられる家はとても少なかった。その中で特に惹かれた一軒の古民家も、権利者がすぐにはわからず、司法書士に確認していただいたところ、一三人という驚くべき状況だった。権利者との調整や手続きなどに手間取り、古民家の取得は翌年の年末までかかってしまった。

また、行政や民間事業者との協力関係を築いていくためには、法人を設立し、長く継続できる体制を整えることが必要だと考え、二〇一五年二月に「NPO法人男木島図書館」を設立した。NPOの運営には、島出身の漁師や高齢者、移住者など図書館の理念に賛同してくれた住民に加え、島外の有識者にも入っていたいただき、島内外の視点を活かせるように工夫している。NPOの設立時、まだ図書館は完成しておらず、まずオン



図書館の開館まで続いた週に1度の移動図書館。オンパに本を載せて(左が筆者)。

バ（手押し車）による移動図書館を始めた。住民向けに図書の貸し出しを行ないながら、あわせて図書館がどのような場になることを望むのかといった声や、島で必要とされる書籍などをリサーチしていた。移動図書館は、古民家の改修と並行して、週に一度の頻度で稼働、図書館の開館まで続けた。

古民家の修繕には、島内を中心に島外からも広くボランティアを求め、二二〇人に参加いただいた。また、図書と書架の整備資金としてクラウドファンディングを実施し、二〇五人もの方々から資金をご提供いただいた。つまり男木島図書館は、島内人口のほぼ倍である三〇〇人以上の皆さんの協力を得て開館したことになる。

地域の方々の手を借りながら準備を進めたことで、住民と図書館との距離が縮まり、本に興味はないと口にしていた方も図書を借りに足を運ばれるようになっていく。



修繕前の男木島図書館。



男木島図書館の改修には、多くのボランティアの方々にお手伝いいただいた。

### 地元NPOとの連携による定住支援

二〇一六年三月、以前ボランティアとして古民家の修繕に関わった世帯が、バンコクから男木島へ移住してきた。移住後は、英国のIT企業に転職し、仕事をリモートで続けている。ほかにも、世界一周の途中で偶然立ち寄り、図書館での交流をきっかけに島に移り住んでカフェを開いた家族。アメリカから島を訪れて気に入り、越してきた家族もいる。嬉しいことに、彼らは初めてこの島を訪れた帰り



移住者のために図書館の庭に小さな小屋「老人と海」を整備。



完成した「老人と海」。

一方、芸術祭の舞台となっている島の方々や、観光業の人たちからは「オーバーツーリズム」という言葉が聞こえるようになってきた。男木島の人々は好奇心旺盛で人懐っこく、島でアートが展開されることを歓迎している。しかし、普段は人影まばらな男木島に何万人もの人が来ると、やはり疲弊する面もある。そもそもこれだけの人々を受け入れるキャパシティが島にはないのだ。もちろん、

の定期船の中で「もし僕らがクレイジーなことを言っているのならそう言って欲しいのだけど」と前置きして、島に住もうと話し始めたという。

移住者が徐々に増えていくなか、「移住支援は行なっていくけれど、定住支援もできないだろうか」と考え始めた。島に住むと決めても、島内で働き口を見つかるか、リモートワークが可能な職に就かなければ生活できない。また、たとえそれが解決できたとしても家の改修や店舗の準備などに多くの時間を費やさなければならない。そこで男木島

### 来島者が急増、見直しが求められる島の観光

図書館ではNPO法人男木島生活研究所（註2）と協力しながら、図書館の庭にレンガを敷き、カフェなどのポップアップショップを出せる小さな小屋をつくった。海を愛した作家ヘミングウェイにちなんで「老人と海」と名付けたその小屋では、これまでに、移住世帯の二家族がショップを試験的に出店し、その後の自分たちの店の開業につなげている。

筆者は、瀬戸内国際芸術祭をきっかけに移住を決意し、学校再開、図書館の開館と歩みを進めてきた。

同芸術祭は、三年に一度の大イベントで、二〇一六年は五万四三三二人、一九年は七万一八〇九人が島を訪れるなど大きな盛り上がりを見せている。

観光業を生業としている人々にとっては大きなチャンスでもあるので、今後は、両者のバランスをどのように取っていくのが課題となるだろう。

新型コロナウイルス感染症の脅威が身近に迫っているなか、男木島図書館では三月から島外の来館者の立ち入りを制限している。島内向けの図書貸し出し業務を中心に活動しており、島の子どもたちが、学校とは別にコミュニティを維持できる場所としても機能している。島外とはオンライン上での交流が頻繁に行なわれるようになってきており、他の公共図書館関係者との会議や、島と島を結んだ情報交換などが活発化している。

## 島の多様性を活かした未来の教育プロジェクト

現在、島では、保護者を中心に「島ならではの未来の教育」を考えるプロジェクトが進行中である。これは問題解決型学習（PBL: Project Based Learning）を、地域の人や香川大学大学院の学生などとともに進めるもので、男木小学校の総合学習の時間の一部を使い実践している。例えば、「島の学校に子どもを増やすためにはどうすればいいか」という問いに対し、子どもたちが考えた解決方法を一緒に試していく。大人は不要な口出しをせず、失敗をしてもそれを学びとすることで、柔軟に考える力、失敗を恐れずに成功に結びつける力、島の環境を活かしていく力などを育成していくものだ。



未来の教育プロジェクトのウェブサイト (<http://ogijimamirai.com/>)。

この活動には「男木島ならではの質の高い教育環境を実現する」「大人が男木島の教育環境について発信する」という二本柱がある。島に住む若い世代のほとんどは移住世帯で、以前の居住地もさまざま。職種もウェブデザイナー、エンジニア、映像ジャーナリスト、パン屋、美容師、教師などがより生きやすくなる教育環境の整備を目指している。



男木島図書館には子どもたちや高齢者など幅広い世代の住民が訪れる。

### 島に愛される場所であるために

図書館は誰もが無料で利用することができるが、本という知の資産を平等に享受できる場所である。人と話すことも、話さずにいることも自由。本と人をつなぎ、本を媒介にして人と人とを結びつける空間でもある。

男木島図書館が島の人たちに愛される場所であり続けるためには、規模を適正サイズに留めておくことも必要なかもしれない。芯の部分を変えることなく、それ以外は変化を恐れずに試行錯誤を繰り返しながら柔軟に対応している。今後この小さな私設図書館の活動を見守っていただけたらと思う。

註1.. 連合自治会をはじめ、地域の各種団体・企業・NPOなどで構成されている。おおむね小学校単位で、高松市内には四四団体ある。

註2.. 若い世代の定住促進と地域交流活動を支援し、存続可能な地域社会の構築に寄与することを目的として二〇一五年に設立。島の住民や若い移住者が所属している。



額賀順子 (ぬかが じゅんこ)

NPO法人男木島図書館理事長。大阪芸術大学芸術学部卒。ウェブデザイナー、写真家。オープンソースのWordPressに関わり、グローバルコミュニティチームにてDeputyを務める。著書に『WordPressのやさしい教科書』。雑誌「せとうちスタイル」「みんなの図書館」にて連載中。現在の姓は福井。